

タマネギべと病の二次伝染抑制効果の高い薬剤の選定

タマネギべと病に対して効果の高い薬剤を予防剤と治療剤に分けてスクリーニングを行ったところ、べと病の二次伝染を抑制する薬剤として現在使われている薬剤以外に数種の薬剤の選定ができた。

内 容

本試験は薬剤によりタマネギべと病の二次伝染を制御することを目的に行った。

試験は2018年～19年にかけて淡路農業技術センター内に設置したドレンベッド（1区80株、3連制）で行った。試験に供試した薬剤は現在、淡路島の現地で使用されている薬剤を中心に一部新規薬剤を含めて検討した。中生品種「ターザン」を供試し、2018年11月27日に定植した（株間10cm、条間20cm、4条植え）。なお、発病を促すために2019年2月13日にドレンベッド1基につき一次伝染株を2株ずつ均等に植え込んだ。試験区のべと病の初発は4月5日であった。薬剤の散布は予防剤については3月5日、13日、25日、4月5日（初発）、15日の計5回、治療剤の散布は初発を確認後、4月5日、15日、26日の計3回、肩掛式電動噴霧器を用いて200ℓ/10a散布した。なお、各種薬剤には展着剤ラビデン3Sを加用した。発病調査は5月3日に行った。

供試した予防剤の中ではシアゾファミドの効果が最も高く、マンジプロパミドはやや劣った（図1）。

治療剤の試験では、全体的に各薬剤とも防除効果が高かった（図2）。淡路島で使用していない薬剤としては、ベンチアバリカルブ+フルオピコリドの効果が高かった。他県で耐性菌の発生が報告されているメタラキシルM+マンゼブも非常に

高い防除効果を示し、本県では継続して使用可能であると判断した。

今後の方針

スクリーニングを継続するとともに新規薬剤の農薬登録に向けて効果試験を実施する。

岩本 豊（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2448）

用語解説

【予防剤】発病前から散布しておくことにより作物を保護する農薬。

【治療剤】一般的に浸透移行性を有し、作物体内で殺菌的に働き作物を保護する農薬。

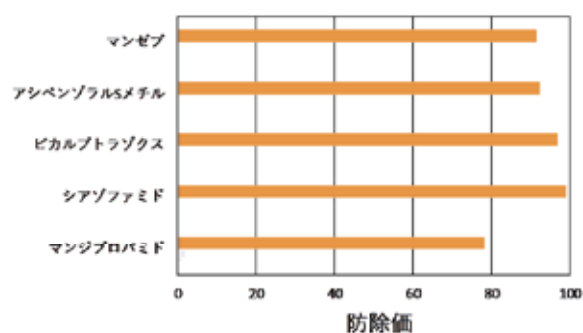


図1 予防剤の防除効果

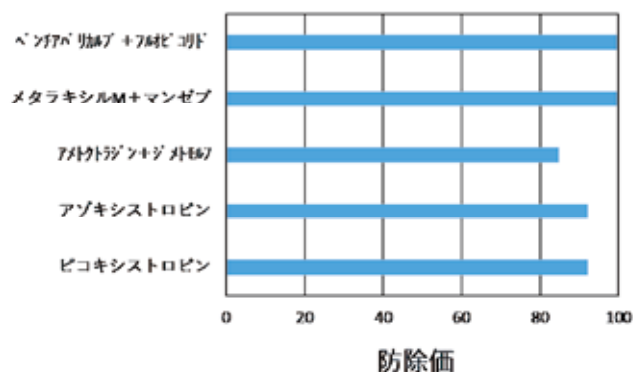


図2 治療剤の防除効果